

CAROWAA

CAROWAA —ちやろわ

アチヨリの言語で「our village」「our home」「our land」といった意味を持つ言葉です。

JICAプロジェクトとともに自分たちの故郷がより発展する、という気持ちを込めて、グルオフィスの現地スタッフが名づけてくれました。

ちなみに配色イメージは北部らしく「ラテライト」です。



シエラレオネ「地域行政能力向上プロジェクト」 カウンターパートとの技術交換プログラム

9月21日から3日間、シエラレオネで実施中の技術協力プロジェクト「地方行政能力向上プロジェクト」のカウンターパート7名（内務地方自治地域開発省3名、カンビア県2名、ポートロコ県2名）と吉野専門家がグルを訪れ、ウガンダ北部プロジェクトの関係者（地方自治省、首相府、アチヨリ7県の知事や行政官など）と「技術交換プログラム」を実施しました。

シエラレオネは1991年から政府軍と反政府軍との間で紛争が続き、2001年の停戦合意後、2002年に内戦終結が宣言されました。一方、ウガンダ北部においても約20年に渡る紛争の歴史があり、どちらも紛争経験国として現在、復興から開発への移行フェーズにあると言えます。紛争によって長期間不全状態に陥った地方行政機能や住民組織を強化するためにJICAでは両国で協力を展開しており、シエラレオネとウガンダ両国で地域開発の経験と課題を共有し、互いの事業実施に活用することを目的にプログラムを実施しました。

プログラム1日目は両国の地方分権化について参加者が発表。互いの地方行政システム



開会のスピーチをする
平井プログラムマネージャー



発表をするウガンダ首相府からの
参加者



「地方分権と県議会の役割」について
発表するポートロコ県副議長

について理解を深めました。夕方には終了予定でしたが活発な意見交換が続き、まったく終わる気配がありません。途中からは停電で会場が真っ暗になってしまったのですが、参加者は気にも留めず、意見を述べ合っていた真剣な姿が印象的でした。

2日目はフィールド視察。JICAが行政能力向上支援の一環としてアムル県に建設中の多目的ホールや職員宿舎、給水施設を訪問しました。立派な建物に強いインパクトを受けたようです。アムル県庁では知事室に招かれ、その場で自発的にディスカッションも行われました。「どんな支援が必要なのかもっとアピールすれば、JICAはシエラレオネでもこの

ような施設を建設してくれるのですね！」とシエラレオネ内務地方自治地域開発省副大臣が発言し、吉野専門家は「帰国してから嫌な予感がします・・・」と苦笑いしていました。

3日目、最終日はラップアップセッション。これまでの学びを総括し、どのように活用していくのかをそれぞれがコメントしました。最後にはシエラレオネのみなさんからウガンダ側参加者へのプレゼント贈呈。木彫りの壁飾りを全員が受け取りました。シエラレオネ側は全員気合いが入っており、服装はばっちり、常に時間前行動が実行できており、シエラレオネ専門家のみなさんの日頃の指導が行き届いていることに感心しました。（吉野専門家の話によれば自国ではアフリカ時間だそうですが・・・）今回の学びが両国で活用されることを期待しています。次はシエラレオネで第2回技術交換プログラムを開催したいものです。



給水施設のソーラーパネルに見入る
シエラレオネ側参加者



アムル県庁、バボサボカウンティの職員宿舎を
視察する参加者たち



多目的ホール建設現場を視察



アムル県庁知事室での意見交換



プレゼント贈呈式



参加者全員で記念撮影

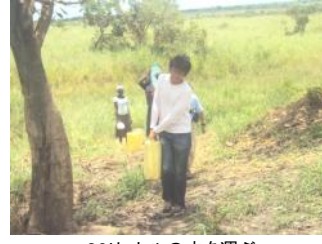
高橋新入職員 ハット生活を体験



牛耕に挑戦



鶏のさばき方を習う



20リットルの水を運ぶ



現地の女性に指導を受けながら水汲みをする中島記者

7月からウガンダに新人OJT研修の一環で派遣されている高橋職員が9月6日より3週間、グル周辺に滞在しました。今回の目玉は4泊5日の現地生活体験。緒方理事長の「新人に現地の人々の暮らしぶりを経験させ、現場感覚を体で学んでほしい」という方針のもと、ウガンダ事務所の関所長が発案し、JICAプロジェクトを実施中のヌウオヤ県ルリャンゴ村でホームステイをすることになりました。

当然ながら水なし、電気なし、家は北部の伝統的家屋であるハット。「もしマラリアになったら大変ですよ、言葉も通じないし・・・」と現地事情をよく知るコンサルタントチームが心配する中、グルオフィスでは現地生活ガイドとして、村民に絶大な人気を誇るコミュニティ開発チーム・シエムス団員(エチオピア出身)をはじめ、グルオフィスやコンサルタントチームのローカルスタッフにルオ語への通訳を兼ねてローテーションで付き添いを依頼、折られたら

式蚊帳や寝具一式、灯油ランプ、水、食料などを準備し、緊急時の対応を含め万全の態勢で高橋職員を送り出しました。メモによればルリャンゴ村での生活は以下の通り。

6:00 起床

7:00 農作業

10:30 男性は休憩、朝食、水浴び
女性は水汲みや朝食の準備

14:00 農作業

17:00 男性は休憩、水浴び、落花生の皮むき
女性は夕食の準備

19:30 夕食

21:30 就寝

高橋職員、村では水汲み、脱穀、食事の支度、農作業などあらゆる仕事を体験しました。水を汲む浅井戸はステイ先から1キロもありませんが、20リットルの水を運ぶ際は果てしなく長い距離に感じたそう。村の女性は20リットルのポリタンクを頭に乘せ、1日何往復もしますが、同じように頭に乘せてみるとふ

らふらしてしまい、住民に爆笑されたそうです。また、牛耕では4頭の牛を操るどころか牛に引きずられそうになったとか。村の人々がいかに強靱なのがよくわかります。ホームステイ後半はちょうどウガンダ北部を取材で訪れていた産経新聞の中島記者も合流し、一緒に現地生活体験をしました。ホストファミリーを手伝うというよりは足手まといになっていたという噂もありますが、みなさん温かく見守ってくれたとのこと。5日間のハット生活を終えてグル市内に無事帰還した高橋職員、周囲が驚くほど真っ黒に日焼けしていました。グルが大都会に見えたそうです。この経験を糧に、現場感覚を忘れない職員に成長してください。

燃料がない！

このところウガンダ全体で燃料不足の傾向にあります。報道によれば、燃料の到着地であるケニア・モンバサ港のオイルタンカー接岸用棧橋の修理が遅れており、タンカーの接岸が制限されていることが原因のようです。内陸国のウガンダでは他に入手ルートがなく、燃料備蓄をしなかった政府の責任を問う声が上がっています。

グル周辺も打撃を受けており、市内に6か所あるスタンドのうち、首都カンパラから燃料が運搬されるのは毎日2か所程度。燃料が到着したという情報が入るやいなや、長蛇の列、暴動が起きそうな勢いです。入荷量が少な

く、すぐに売り切れてしまうため価格がどんどん上昇しており、数か月前までディーゼルは1リットル2300シリング(約1ドル)程度でしたが、今は2700シリング。毎日のように値上がりしている状態です。ガソリンに至っては1リットル3000シリングから4000シリングに！緊急時に備えて、グルオフィスやプロジェクトでは車両を常時満タンにするよう注意するとともに、オフィスで頻繁に起こる停電に備えて発電機用燃料も普段より多めに備蓄するよう、対策を講じています。最も打撃を受けているのは現地住民です。一般的な交通手段であるバイクタクシーの



ガソリンスタンドに殺到するバイクタクシー

数が激減し、同時に運賃が2倍以上に値上がり。グルオフィスのスタッフもバイクタクシーを拾えないという理由で毎朝遅刻しがちです…。北部の治安回復とともに、市民生活も石油燃料に依存する部分が増えており、事態が深刻にならないよう願うばかりです。

オフィス運営全般、広報などを担当していた上田企画調査員が9月30日で任期を終え、帰国しました。任期延長の可能性についても検討をお願いしていましたがそれも叶わず、無念の帰国です。後任は入選中で派遣時期は未定のため、ニュースレター発行はしばらくお休みになるかもしれません。長い間お世話になり、ありがとうございました。みなさんからのニュースレターへのコメントをいつも励みにしていました。グルオフィス立ち上げから関わり、なんとか軌道に乗せた経験を今後活かせたらと思っています。(上田めぐみ)